

『山月記』 残照

池田一彦

中島敦の「山月記」は、作中の言葉を援用して要約するならば、「詩人に成りそこなつて虎になつた哀れな男」李徴の物語である。全体は、地の文の語り手によって首尾統括されているが、作の大半を占めるのは、その李徴の「声」（又は「草中の声」「叢中の声」等々の「声」）によって語られる一連の出来事であり、李徴の苦衷であり、ワキに哀惨の一行を控えてその哀惨とのやりとりこそ有るものの、本質は、対話劇と言うよりも独白劇に限り無く近いものと言うことが出来る。

地の文の語りが、もっぱら人物、状況、事の顛末の説明や補足といった、物語の進行役として一貫した中性的役割、言わば〈静〉の部分を担当しているのに対して、李徴の「声」の語るところは、彼の内面、心に即して時に理智的に、また時に感情的に言わば〈動〉の部分を担当していると言つてよい。そして、一見した処では、李徴の「声」は、次から次と言葉を紡ぎ出して行き、その言葉にあたかも導かれるように彼、李徴という人間の奥深く

潜む本性を顕わして行くものでもあるかの如く思われもするのである。だが、事はそう簡単ではない。「声」の語るところは、確かに人間李徴の内面に対する認識であり、次第にその自己認識に深まりが認められるのも事実であるが、これはこれで飽くまで虎と化した李徴が己れの内面を省察して得られた、彼にとつての、真実であり自己認識なのであるからだ。聞き手は（読者は）李徴の「声」の語りに半ば引き込まれ、感情移入しつつ彼の内面の劇を窺い見るのであるが、一步退いてこれを考えるならば、「声」の語るところの主観性は逃れ難く、必ずしも客観的なものとはばかりは認められないのである。

そうした点を踏まえつつ、だが、当面は「声」の語るところに耳を傾け、更には、この物語の孕む問題性について私見を加えることとしたい。

袁慘との遭遇後、叢中から「どうか、ほんの暫くでいいから、我が醜悪な今の外形を厭はず、曾て君の友李徴であつた此の自分と話を交して呉れないだらうか」と懇請した李徴の「見えざる声」は、やがて虎と化して以来の苦悩を縷々語り、己れの最も執着した「詩」の伝録を依頼、自嘲気味に即席の詩を述べて後、自らの運命について内省し、残された妻子の面倒を頼みつつ別れを告げるのであるが、就中目を引くのが、従来多くの言及がなされて来た「臆病な自尊心」と「尊大な羞恥心」の一条であるのは論を俟つまゐ。何故か。一言で言えば、実質同義とも思われるこの二つの語句の圧倒的な存在感ゆえである。逆説的な言葉の連なりが修辭的にも卓抜で、読み手に対し相当に強烈な説得力を有するがゆえであると言つて良からう。ただ、そのために「山月記」という作品の読解上、見えにくくなつてしまつた点もまた有るのではあるまいか。

① 何故こんな運命になつたか判らぬと、先刻は言つたが、しかし、考へやうに依れば、思ひ当ることが全然ないでもない。② 人間であつた時、己は努めて人との交を避けた。人々は己を倨傲だ、尊大だといつた。実は、それが殆ど羞恥心に近いものであることを、③ 人々は知らなかつた。勿論、曾ての郷党の鬼才といはれた自分に、自尊心が無かつたとは云はない。しかし、それは臆病な自尊心とでもいふべきものであつた。④ 己は詩によつて名を成さうと思ひながら、進んで師に就いたり、求めて詩友と交つて切磋琢磨に努めたりすることをしなかつた。⑤ かといつて、又、己は俗物の間に伍することも潔しとしなかつた。共に、我が臆病な自尊心と、尊大な羞恥心との所為である。⑥ 己の珠に非ざることを惧れるが故に、敢て刻苦して磨かうとせず、又、己の珠なるべきを半ば信ずるが故に、碌々として瓦に伍することも出来なかつた。⑦ 己は次第に世と離れ、人と遠ざかり、憤悶と慙恚とによつて益々己の内なる臆病な自尊心を飼ひふとらせる結果になつた。人間は誰でも猛獸使であり、その猛獸に当るのが、各人の性情だといふ。己の場合、この尊大な羞恥心が猛獸だつた。虎だつたのだ。⑧ 己が己を損ひ、妻子を苦しめ、友人を傷つけ、果ては、己の外形を斯くの如く、内心にふさはしいものに変へて了つたのだ。今思へば、全く、己は、己の有つてゐた僅かばかりの才能を空費して了つた訳だ。⑨ 人生は何事をも為さぬには余りに長いが、何事かを為すには余りに短いなど口先ばかりの警句を弄しながら、事實は、才能の不足を暴露するかも知れないとの卑怯な危惧と、刻苦を厭ふ怠惰とが己の凡てだつたのだ。⑩ 己よりも遙かに乏しい才能でありながら、それを專一に磨いたがために、堂々たる詩家となつた者が幾らでもあるのだ。虎と成り果てた今、己は漸くそれに気が付いた。それを思ふと、己は今も胸を灼かれるやうな悔を感じる。己には最早人間としての生活は出来ない。たとへ、今、

己が頭の中で、どんな優れた詩を作つたにした所で、どういふ手段で発表できよう。まして、己の頭は日毎に虎に近づいて行く。(傍点原文)

右で私に傍線を施した部分について、①③⑧⑨⑩については後に譲ることとして、他は殆ど、作品冒頭の地の文の語りに言う、李徴が官を退いて後「人と交を絶つて、ひたすら詩作に耽」り「詩家としての名を死後百年に遺さうとした」ことと関わるものである。すなわち、人との「交」わりを拒絶し、ひたすら「詩」人としての「名」を求めることへの苛烈な執着の有り様と関わる部分である。(この執着の様は、李徴自身の語りとしても、「何も、之に仍つて一人前の詩人面をしたいのではない。作の巧拙は知らず、とにかく、産を破り心を狂はせて迄自分が生涯それに執着した所のを、一部なりとも後代に伝へないでは、死んでも死に切れないのだ」とか、「羞しいことだが、今でも、こんなあさましい身と成り果てた今でも、己は、己の詩集が長安風流人士の机の上に置かれている様を、夢に見ることがあるのだ」と再三繰り返されている。「人との交」、具体的には「師に就」いたり、「求めて詩友と交」わることが意図的に避けられ、しかも同時に、自らの「詩」業が自らの「名」と共に「詩集」として例えば永く「長安風流人士」の机上に置かれてあることを夢想する、ということ。一方でまた、「人との交」は「俗物」「瓦」「己よりも遥かに乏しい才能」の連中とも当然のことのように忌み避けられたのだ。

元来、「詩」というものは、他人に読まれ且つ評価されることを欲するものであろう。勿論、最初から他人に見せる、見られることを前提としないで作られる自家用の詩というものが有って何ら不自然ではないのだが、李徴にとつての「詩」は、⑩にも見えるように予め「発表」を前提とし、「長安風流人士」の如く品格ある人々にその「名」と共に永くそれこそ「第一流の作品」として評価され認められることを望まれている、極めて対他的

な存在としての「詩」なのだ。だが、繰り返す、それが「人との交」を一切絶った処で夢想されるということは一休どういふことであるのか。李徴の「声」は、自己分析的に「臆病な自尊心」と「尊大な羞恥心」を、更には「卑怯な危惧」と「刻苦を厭ふ怠惰」を「人との交」を絶った理由として析出しているものの如くであるが、そこには、排他的な境遇と対他的な、他者志向性という矛盾した様相が共存しているのではないかと思うのである。そして、一方で「長安風流人士」と言い、「師」と言い「詩友」と言う、李徴の見仰ぐべく何がしかの憧憬と親愛の対象を持ちながら、一方では「俗物」（作品の冒頭では、地の文の中ながら、「賤吏」「下吏」「俗悪な大官」「鈍物」等の語が鏤められていた）以下の者達に対する極めて侮蔑的な見下しの視線が用意されているということがある。ここには、抜き差しならない李徴という人物のエリート意識と上昇志向が存在しているのでもある。（原典の「人虎伝」における「皇族の子」という設定の反映でもあろうか。）

次いで、傍線を付した①と③に関わることを述べよう。

先ず、①について、これは、李徴の「声」の語る次のような部分と対応していた。

どうしても夢でないと悟らねばならなかつた時、自分は茫然とした。さうして懼れた。全く、どんな事でも起り得るのだと思うて、深く懼れた。しかし、何故こんな事になつたのだらう。分らぬ。全く何事も我々に判らぬ。理由も分らずに押付けられたものを大人しく受取つて、理由も分らずに生きて行くのが、我々生きもののさだめだ。

我が身に起こった虎への変身という不可思議をきっかけに、「生」あるもの全てが正に理不尽・不条理な生を生きて行かねばならぬという「さだめ」「運命」について述べているのだが、重要なのは「分らぬ」「判らぬ」と

再三繰り返し、「生」に潜む、人智の及び難い絶対的な不可知の感情がそこに語られていることである。だが、この物語において、より重きを置くべきは、更にその先にある。ここからは、③部分に関わるのだが、同じ「分ら」なきでも、生きものの「さだめ」「運命」といった何か形而上的なものについてのそれではなく、もっと人間一般に身近で且つ深く本質的なもの——「心」——についてのそれである。虎の外形と「人間の心」の共存に（その入れ替わりに）苦しむ李徴の「声」は言う。

一体、獣でも人間でも、もとは何か他のものだったんだらう。初めはそれを憶えてゐるが、次第に忘れて了ひ、初めから今の形のものだったと思ひ込んでゐるのではないか？ いや、そんな事はどうでもいい。己の中の人間の心がすっかり消えて了へば、恐らく、その方が、己はしあわせになれるだらう。だのに、己の中の人間は、その事を、此の上なく恐しく感じてゐるのだ。あゝ、全く、どんなに、恐しく、哀しく、切なく思つてゐるだらう！ 己が人間だった記憶のなくなることを。この気持は誰にも分らない。誰にも分らない。己と同じ身の上になつた者でなければ。

束の間、理屈ばつた事を口にする李徴であるが、「いや、そんな事はどうでもいい」と思い改まると、一気に彼の感情は理屈を越えて迸り出る。作中、「正確に、ではないが」唯一「誰にも分らない」と繰り返し嘆く李徴の「声」は、悲壮にして且つ深刻・切実である。これが、「故人」すなわちかつて「最も親しい友」であつた袁傚を前にしての発言であることの意味は大きい。李徴の言葉は、「己と同じ身の上になつた者でなければ」と付け足されることで、自分と同じ思いを、袁傚さえをも含めた「誰にも」分らないと訴えているのだ。人と人との思いが、心が共有出来ないということ。李徴の苦しい思いは、竟に「誰にも分らない」のだ。この直後、李徴の心を

捕え続けた「詩」の伝録を依頼すべく、「所で、さうだ。己がすっかり人間でなくなつて了ふ前に、一つ頼んで置き度いことがある」と、正に心を切り換えて再び理性的な李徴の「語り」は続くのだが、「人間の心」の〈分らなさ〉についての言及は、例の「臆病な自尊心」「尊大な羞恥心」を巡る自己分析的な言説の後、この稿はじめの引用文の直後に次のような形で、もう一度姿を現わすのである。

どうすればいいのだ。己の空費された過去は？ 己は堪らなくなる。さういふ時、己は、向ふの山の頂の巖に上り、空谷に向つて吼える。この胸を灼く悲しみを誰かに訴へたいのだ。己は昨夕も、彼処で月に向つて咆えた。誰かに此の苦しみが分つて貰へないかと。しかし、獣どもは己の声を聞いて、唯、懼れ、ひれ伏すばかり。山も樹も月も露も、一匹の虎が怒り狂つて、哮うなづつてゐるとしか考へない。天に躍り地に伏して嘆いても、誰一人己の気持を分つて呉れる者はない。丁度、人間だつた頃、己の傷つき易い内心を誰も理解して呉れなかつたやうに。己の毛皮の濡れたのは、夜露のためばかりではない。

前の〈分らなさ〉が、虎と化して「人間だつた記憶のなくなる」ことへの「恐しく、哀しく、切な」と思う自らの心情が「誰にも分らない」とするもので、どちらかと言うと、同じ「人間」に分つて貰えない苦悩を語っていたと思われるのに対し、ここでの〈分らなさ〉では、その分つて貰いたいと思う、その対象が格段の広がりを示す、という相違があるのだが、両者、虎の李徴が、自分の思い、心の様子を他者に少しでも分つて欲しい、と願う切実さで共通している。言わば、前者の発展形として後者を捉えて良いのではなからうか。「胸を灼く悲しみを誰かに訴へたい」と言う「誰か」は、もう必ずしも「人間」だけとは限らない。「誰かに此の苦しみが分つて貰へないか」の「誰か」も同断、それは「獣ども」でも良いし、更には、所謂生きものならざるものたち、

「山」であつても「樹」であつても「月」であつても「露」であつても良いのである。己れの周りに存在する有りとあらゆるもの、その「誰一人己の氣持を分つて呉れる者はない」のであり、それだけ痛切に、「己れを」、「己の氣持」を少しでも分つて貰いたいと心底冀つていたのである。分つて貰いたいのに竟に分つては貰えぬ絶望感。絶対の孤独を生きるしか途は無いのか——。そして、李徴の「声」は続けて言う。「丁度、人間だった頃、己の傷つき易い内心を誰も理解して呉れなかつたやうに」と。だが、翻つて思いみるに、その「己の傷つき易い内心」とは何であるのか。先の「臆病な自尊心」「尊大な羞恥心」同様、存在感は有つても、所詮は抽象語の域を出るものではないのではないか。そして、それらには、李徴の冷徹な自己分析と言うより、いっそ自らの弱さを隠し鎧おわんとする自己弁護と言うか自己擁護の趣きすら漂つていはいはしないだろうか。これも「己の傷つき易い内心」の内実が不鮮明で、先天的にそれが善いもの、正しいものであるというようなことが前提されている叙述のように見えるのであり、「誰も理解して呉れなかつた」という表現からは、自分があたかも被害者であるともいふ意識が見え透く。冒頭、李徴の「語り」の必ずしも客観的ならざることに触れておいたが、右の科白には、どうも独善的な被害者意識がチラついて見えるのである。果たして、李徴の「傷つき易い内心」を察知出来なかつた周りの者達に、それ程の責めは有るのだったろうか。

一方また、これは、李徴に責めを負わせる訳には行かないのだが、傍線を付した⑧について見るに、ここでは、「尊大な羞恥心」が「己を損ひ、妻子を苦しめ、友人を傷つけ、果ては、己の外形を斯くの如く、内心にふさはしいものに変へて了つた」と言うのだが、少なくとも虎に化す前の李徴が「友人を傷つけ」たという一条は、作中に対応する記述を見出せない、ということがある。この辺の李徴の語りは、同じく傍線⑨の「人生は何事を

も為さぬには余りに長いが、何事かを為すには余りに短いなどと口先ばかりの警句を弄しながら」などといった自己批評的な（或いは、いっそ「自嘲的」な？）語り口を有しつつも、やはり「臆病な自尊心」「尊大な羞恥心」という決め科白を中心に多分に修辭的な（内容と言うよりも表現の工夫・作為に重点が置かれている、という意味で）言い廻しが展開していると見るべきであつて、李徴の虎ではないが、語り手自身が自らの語りに酔っているような気味合いの一段であることも改めて指摘して置きたく思う。

そして、⑩を見るに、李徴は「己よりも遥かに乏しい才能でありながら、それを専一に磨いたがために、堂々たる詩家となつた者が幾らでもあるのだ」と悔み、語る。各自が持てる「才能」を「専一に磨く」というそれだけの事が李徴には不足していた。「臆病な自尊心」や「尊大な羞恥心」「云々といった抽象的で面倒な自意識など、だとすれば、どうでも良かったのではないのか。具体的な「刻苦」の一つ一つ、それこそが彼には必要だつた。それは、恐らく、李徴自ら語るように「進んで師に就いたり、求めて詩友と交つて切磋琢磨に努め」ることであつた。そうして「人との交」を拒絶しないことこそが、彼の選ぶべき様だつたのだ。袁愴が李徴の旧詩に感じ取つた「第一流の作品」としての「何処か（非常に微妙な点に於て）缺ける所」と関わるのも、一にこの点だつたのではあるまいか。

「詩」と言い「名」と言い、詰まる所は〈言葉〉であり、李徴は言わば〈言葉の呪縛〉に囚われた男である。そして、その〈言葉〉の対他的性格に反して、一切「人との交」を絶つという〈行為〉に出た李徴には、始めから成功は遠いものだつた。しかも、彼の隠されたエリート意識は、益々成功を彼から遠ざけた。他人を分るうと

しない人間が、自分の気持だけは他人に分って貰いたいと望み、そして当然それは叶えられないものだった。虎になった李徴の叫びには、心の疎通性への深い絶望が籠められている。「山月記」という作品に刻み込まれた李徴の訴えの本質的な部分は、「臆病な自尊心」や「尊大な羞恥心」といった自己の紡ぎ出した悔みの言説・弁明の真実らしさによりも、むしろ自分の「心」は竟に他者に分って貰えないのだというどうにも抗えない自己の運命に対する悲痛な心の叫びにこそ認められるのであり、人間が虎に化すという奇異な設定を超えて、それは読み手の心に切実に今も響き渡っているのである。

（引用本文は、筑摩書房版『中島敦全集』第一卷（初版第一刷は一九七六年刊）に拠った）

（完）